様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００２４

研究課題名（和文）近代東アジアにおける宗教概念の帝国史的研究

研究課題名（英文）Imperial history study of the concept of religion in modern East Asia

研究代表者
金　泰勲（Kim, Taehoon）

立命館大学・文学部・任期制講師

研究者番号：１０６０８７０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、帝国史的な観点から植民地期朝鮮の宗教状況を再解釈することに目的があった。主な成果は2点でまとめることができる。①韓国国家記録院が所蔵している朝鮮総督府の文書のなかで宗教関係文書に注目し、その資料的重要性をアピールし、②近代宗教史研究において、「帝国宗教論」という新しい視座を提供できたことである。①の成果は、同文書に関する関心を高め、特に韓国の学界において関係文書の翻刻・刊行作業につながっている。また②の成果は、日本の学界において「帝国神道論」という視座へと広がり、近代宗教史研究の進展に貢献している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study lies in seeing colonial korea's religion from the perspective of imperial history. The two main achievements go like this. First, it finds the significant importance of the religious documents studied and written by the Japanese Government General of Korea. it leads Korean historians to pay special attention to the documents, resulting many reprinting and publication of the papers. Second, it presents a new perspective called "imperial religion" to the modern religious history studies. This study is widened into "imperial Shinto" in the Japanese academic worlds and make a contribution to the study of modern history of religion.

研究分野：近代宗教史

キーワード：帝国宗教　近代宗教　宗教概念　植民地朝鮮　植民地宗教

１．研究開始当初の背景

帝国日本の「本国」から帝国の植民地諸地域へ移植された日本の諸宗教はいわゆる「近代宗教」である。というのは、明治期の近代化のなかで、神社、教派神道、仏教、キリスト教、民間信仰など、日本のすべての宗教的領域は、国家と社会との関係によって、教義や組織を含む社会的存在様式において、一応、近代化の過程を経たからである。近代概念としての‘religion’の訳語として「宗教」概念が定着していく過程で、日本の国内では「宗教であること」と「宗教ではないこと」の峻別が行われ、抑圧や差別といった暴力性を伴いながら宗教的領域の再編成が行われたわけであるが、そのような「宗教であること」の同一化を図る「翻訳」作業の発生をもって、それを日本宗教の「近代化」と呼ぶこともできるだろう。そして、日本宗教の近代を考える場合には、国内における「近代化」のみならず、帝国化の側面も含めて考えなければならない。「本国」から植民地へ移動する日本宗教は、植民地での布教活動やそのなかにおける植民地民との接触を通して、植民地を経営する「帝国の宗教」へと転化するのである。要するに、近代日本の宗教は、（１）自らが経験した宗教的領域の再編成における暴力性を、植民地における宗教的領域の再編成過程でそれを再現する「近代化」の伝達者になること、（２）植民地の宗教との接触を通して、帝国の宗教的秩序を作り出すイデオロギーを自らの信仰体系のなかで発見・創造すること、の二点において「帝国の宗教」となる。この観点から研究代表者は、「日本と朝鮮にそれぞれ確固たる宗教的領域が先にあって、一方の日本宗教が他方の朝鮮宗教を侵食するような事態では決してな」く、「自己の内部において曖昧なものとして矛盾を孕む形で未だ存在していた日本の「宗教」概念が、植民地支配という近代的経験に直面して、近代的概念としては未だ未分化の状態にあった植民地の宗教領域を分化させる再編成過程」であったと述べたことがある。しかし、この二つの過程においては、自ら振舞う「近代宗教」の自明さが、植民地の状況のなかで揺さぶられ、「本国」の宗教的状況のなかで見直されるフィードバックが行われたりもする。このような「本国」と植民地で共時的に起こる宗教的連関のなかで形成される「宗教的公共性」のあり方を問うことが、いわば「植民地近代性論」に立脚した植民地宗教研究であるといえよう。なぜなら、「植民地近代性論」が本来もっとも注目している鍵概念が「植民地公共性」だからである。近年、韓国においてこの「植民地近代性論」「植民地公共性論」をリードしている尹海東の言葉をかりれば、「植民地公共性」とは、「植民国家または抵抗勢力によって理念的に提起される公共性ではない。さらに、一定の法則や政治的形式を持って作られていた植民地制度としての公共性とも関係がない。……公共性は社会の自由を拡大するための積極的な志向であり、空間や領域のような固定的な対象と関連するより、流動性をその本質とする価値であるといえる。……公共性はある固定的な社会的実態ではなく、「社会的なもの」が「政治的なもの」へ転換される際に誘発される政治的効果を指す」　概念である（尹海東・黄秉周編『植民地公共性－実態とメタファーの距離』책과함께、2010 年、26－27 頁）。このような「植民地公共性」の観点に立ってみれば、植民地朝鮮における日本宗教の問題を取り扱う研究は、日本と韓国を問わず、未だその出発点に立っているといっても過言ではない。韓国においては、日本仏教など、日本系宗教による帝国主義的な侵略の一環と、それに抵抗/協力する韓国宗教という、民族主義的、国民国家を単位とする議論が主流をしめており、日本においては、「戦前の宗教教 団が国家イデオロギーに密着していたことに対して、戦後において、それは国家による強力な抑圧があったにせよ、宗教本来の普遍性から国家主義を乗り越えることができず、宗教本来の真正さを曲折することであったとする「反省」」（金泰勲「イデオロギーと希望―天理教の三教会同」『日本研究』14、高麗大学校日本研究センター、2010 年、466 頁）や、それゆえに、「「純粋な宗教的精神」をもって国家に対抗していた者、あるいは、国家的イデオロギーに関わることなく、真正な宗教者の道を歩み続けた」、いわゆる「純粋な宗教者」探しの段階に留まっているといえよう。

　このような問題意識の下で、申請者は朝鮮総督府の宗教関係行政文書に注目してきた。植民地朝鮮における宗教の問題に関する従来の研究は、ほとんど各宗派が刊行した諸資料に注目したあまり、共時的に結ばれていた宗派間の関係性や朝鮮総督府がその関係性をどのように把握しながら政策決定を行っていたのかについて明らかにされることがなかった。特に、植民地民の反応や民衆レベルにおける動向などについても、各宗派による「布教」の目線から叙述された諸資料を通しては、その関係性の究明には大きな限界があったといわざるをえない。申請者は、その限界を克服できる史料として総督府文書の重要性を喚起しつつ、基礎的作業にかかり、その成果を、国際シンポジウム「文化的交流と世界化の観点からみた韓国宗教」（韓国・西江大学校宗教研究所主催、2011 年 5 月 20 日）、日本宗教学会第 70 回学術大会パネル「植民地朝鮮と宗教―宗教概念論を超えて」（関西学院大学、2011 年 9 月 4 日）などで研究報告を行った。

２．研究の目的

本研究は、朝鮮総督府（韓国統監府期も含めて）の宗教関係行政文書を検討することによって、近代日韓の宗教交流を、ポストコロニアルの問題と結びつけつつ分析することが

研究目的となる。植民地当局の宗教行政が「内地」と植民地朝鮮の宗教的状況のなかでいかなる「連環」を形成するものであったのか、そして植民地民の自己アイデンティティ形成において、宗教的「連環」がどのような役割を果たしていたのかを民衆宗教史的観点から分析する。

３．研究の方法

本研究は、宗教者間のネットワークやその連鎖を重視するため、人脈・知識人の行動に関わる史料のみならず、行政文書に現れる多くの人的史料を収集することが不可欠であり、そのためには東アジアにおける現在の研究者間ネットワークを活用しての情報交換・意見交換・共同研究会とシンポジウムの開催がより重要となってくる。これは、帝国日本における宗教領域の共時性を民衆宗教史的観点で構築していくためにも、不可欠な方法であろう。以上の方法に基づき、以下の 4 点に着目して朝鮮総督府宗教関係行政文書を分析する。

（1）植民地当局の宗教政策の社会的関係性
（2）植民地当局の宗教政策にたいする植民地朝鮮の知識人、民衆の反応
（3）植民地朝鮮における新宗教（天道教、檀君教など）の自己アイデンティティの形成
（4）植民地朝鮮における宗教領域の再編成

（1）については、朝鮮総督府の宗教政策が西洋宣教師、朝鮮知識人、朝鮮の民衆をそれぞれどのように観察・監視しつつ、どのような政策決定を行っていたのか、また、日本国内の宗教動向とそれはどのように関係しているのかに着目して分析を行う。
（2）と（3）は密接に関係するものとして、主に 3・1 独立運動前後の宗教界の動向、そして宗教に対する知識人、民衆の認識変容に注目する。
（4）では、日本系宗教（仏教、キリスト教、教派神道）の植民地朝鮮への流入過程における諸問題を取り扱う。これに関してはこれまでいくつかの先行研究が存在しているが、それぞれの教派を横断しての分析はなく、何れの先行研究も教派内部的な説明で終止している限界がある。それを乗り越えるためには、（1）で分析した植民地当局の宗教政策を中心におき、それとの関係で各教派はどのように相互協力／対立しつつ植民地朝鮮人を布教対象にしていたのかが明らかにされねばならない。
　研究代表者は博士論文の中でこの問題を若干取り扱っている。1890 年代に植民地朝鮮の日本人居留民社会で設置された神社と日本仏教の朝鮮布教などが当時の宗教情勢の中でどのような位置にあったかについて言及したが、それを踏まえてより具体的に研究していく必要があるだろう。

４．研究成果

（1）2013 年度は研究発表 2 件と２編の論文を執筆することができた。研究発表は、中国の暨南大学で 11 月に行われた国際シンポジウム「他者認識と日本語教育・日本学研究」において、「朝鮮仏教の成立―「帝国仏教論」の射程」というタイトルで個人発表を行なった。
具体的内容は、朝鮮半島において、1890 年代頃から登場する「朝鮮仏教」という概念が、日本人仏教者たちとの接触過程でまずは日本人仏教者の眼差しをフィルタとしつつ登場したこと、そして 1930 年代までに、朝鮮民族の仏教というナショナルアイデンティティとの接合を果たしながら定着した概念であることを明らかにした。それは近代仏教研究の帝国史的観点からのアプローチを可能にする新しい視座として評価できる。これを論文としてまとめたものを同じタイトルで『ブッダの変貌』（法蔵館、2014 年 3 月）に収録した。 同じく 2013 年 11 月に金光教大阪センターで行われた「布教メディア研究会」主催の講演会において「崔宰漢と韓国天理教」というタイトルで講演をした。その内容としては、天理教の植民地朝鮮布教と戦後韓国社会における天理教のあり方について話をした。 近代天理教の植民地朝鮮布教について考察するためには、明治期を通して天理教がその信者数を獲得していくもっとも重要な手段であった病気直しの内容も確認しておく必要がある。そのために研究論文「明治期天理教における「病気直し」の諸形態とその変容」（『日本近代学研究』40、韓国日本近代学会、2013 年 5 月）を発表した。そのなかでは、現代韓国の天理教研究が、戦後韓国社会で唯一生き残った日本系宗教という、天理教に対する固着化した観念にとらわれていること、また、それが宗主国と植民地を共時的に存在していた近代日韓宗教の状況を、国民国家的境界線を準拠にして忘却させる観念であることを批判的に考察した。

（２）2014 年度においては、韓国・国家記録院での史料収集とその整理を中心に行った。特に同所が所蔵している植民地期における朝鮮総督府の宗教関係文書リストの作成が完成した。ただ、韓国語文になっているため、次年度において日本語へ翻訳する作業が必要となる。昨年度の成果を反映したものとして今年度 5 月に韓国日本近代学会において「許永鎬の「朝鮮仏教」認識について」というタイトルで研究報告を行い、8 月に 1 週間集中的に韓国・ソンナム市にある同記録院で史料収集と整理に努め、よりその内容を充実させて 10 月の朝鮮史研究会第５１回大会において「近代『朝鮮仏教』の読み方―許永鎬の認識を事例として」というタイトルで報告を行った。特に本年度に中心的に検討したものは 1930 年代の仏教関係史料である。朝鮮

総督府の寺刹令によって管理されていた朝鮮寺院の状況が総督府の行政文書のなかでどのようにあらわれているのかを分析した。また、これらの成果を踏まえ、植民地朝鮮における仏教の状況を日本仏教との関係で論述した研究書『植民地朝鮮と日本仏教』に対する書評を『宗教研究』第８８巻第３輯/ 第３８１号に掲載することができた。 そして植民地的状況の現代的な意義を考えるべく、現代韓国の宗教状況に関する小論を「現代韓国における宗教と公共領域」というタイトルで『宗教と公共空間ー見直される宗教の役割』に掲載した。また、神道系新宗教として、天理教の現在的状況を把握するために、韓国の大韓天理教本部を訪ねて関係者と意見交換を行った。その成果については、「1930 年代、『天理時報朝鮮版』を読む」というタイトルで 6 月に天理大学で行われた「宗教と社会」学会で発表を行った。

（３）2015 年度は研究最終年度として、主にこれまで収集してきた「朝鮮総督府宗教関係文書」を分析する作業に集中した。また、昨年 6 月に天理大学で行われた「宗教と社会」学会で発表した内容をまとめて「1930 年代、『天理時報朝鮮版』を読む」というタイトルで研究報告要旨を同学会誌『宗教と社会』第 21 号に掲載した。また、研究初年度から収集・作成してきた朝鮮総督府の宗教関係文書リストの日本語訳を完成することができた。これについては 2016 年 9 月に高麗大学（韓国・ソウル）で行われるシンポジウムで発表する予定である。この高麗大学でのシンポジウムは、韓国の円光大学校宗教問題研究所が主催するものとして、同所は朝鮮総督府の宗教関係文書である「宗教に関する雑件綴り」(1906)、「社寺宗教」(1911)を翻刻・出版する予定である。これは本研究がこれまで蓄積してきた研究成果とも深く関わっている。
8 月の夏季休みを利用して韓国・国家記録院で引き続き資料収集を行った。その成果をまとめて、2016 年 2 月に韓国・済州大学校で行われた東アジア宗教研究フォーラム創立大会において、「心田開発運動の宗教言説」というタイトルで研究発表を行った。これについては、2016 年度中に関連学会誌に投稿を予定している。また、2016 年 3 月に行った最終現地調査では、韓国のソウルから、忠州、大田、大丘、慶州、蔚山、釜山、統営、益山、江華と、ほぼ韓国全域に渡って、天理教の現状を確認した。特に日本の天理教本部とは別の信仰世界を開いている大韓天理教団の現地布教の現状を確認することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①金泰勲（発表要旨）「「1930 年代、『天理時報朝鮮版』を読む」」『宗教と社会』第 21 号、宗教と社会学会、査読無、2015 年 6 月、pp.163-164
②金泰勲（書評）「中西直樹著『植民地朝鮮と日本仏教』」『宗教研究』第 88 巻第 3 輯第 381 号、日本宗教学会、査読無、2014 年 12 月、pp.257-262
③金泰勲「 明治期天理教における「病気直し」の諸形態とその変容 」『日本近代学研究』第 40 号、韓国日本近代学会、査読有、2013 年 5 月、pp.221-241

〔学会発表〕（計 6 件）
①金泰勲「心田開発運動の宗教言説」、東アジア宗教研究フォーラム創立大会、2016 年 2 月 20 日、済州大学校（韓国、済州市）
②金泰勲「「近代『朝鮮仏教』の読み方―許永鎬の認識を事例として」」、朝鮮史研究会第五一回大会、2014 年 10 月 19 日、京都府立大学（京都府・京都市）
③金泰勲「1930 年代、『天理時報朝鮮版』を読む」、「宗教と社会」学会第 22 回学術大会、2014 年 6 月 22 日、天理大学（奈良県・天理市）
④金泰勲「許永鎬の「朝鮮仏教」認識について」、韓国日本近代学会第 29 回学術大会、2014 年 5 月 17 日、東明大学校（韓国、釜山）
⑤金泰勲「崔宰漢と韓国天理教」、布教メディア研究会、2013 年 11 月 25 日、金光教大阪センター（大阪府・大阪市）
⑥金泰勲 「朝鮮仏教の成立―「帝国仏教論」の射程」、2013 年暨南大学国際学術シンポジウム「他者認識と日本語教育・日本学研究」、2013 年 11 月 9 日、暨南大学（中国、広州）

〔図書〕（計 4 件）
①金泰勲「現代韓国における宗教と公共領域」、島薗進／磯前順一編『宗教と公共空間―見直される宗教の役割』東京大学出版会、2014 年 7 月、294（pp.217-233）
②金泰勲「「朝鮮仏教」の成立―「帝国仏教」論の射程」、末木文美士ほか編『ブッダの変貌』法藏館、2014 年 3 月、415(pp.295-318)
③桂島宣弘著／金泰勲訳「종교 개념과 국가 신도론-'제국＝식민지'를 중심으로」（宗教概念と国家神道論―帝国＝植民地を中心に）、磯前順一・ 尹海東編『종교와 식민지근대』（宗教と植民地近代）、책과함께（チェッカハムケ）（韓国・ソウル）、2013 年 10 月、431（pp.176-214）
④青野正明著／金泰勲訳「조선총독부의 신사정책과 유사종교-국가신도 논리를 중심으로」（朝鮮総督府の神社政策と類似宗教―国家神道の論理を中心に）、 磯前順一・ 尹海東編『종교와 식민지근대』（宗教と植民地近代）、책과함께（チェッカハムケ）（韓国・ソウル）、2013 年 10 月、431（pp.149-175）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
金　泰勲　（Kim Taehoon）
立命館大学・文学部・任期制講師
研究者番号：10608716

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：